

4 下高野のムラの石造物

藤 由美

はじめに

八千代市東端の印旛沼に注ぐ高野川に沿った下高野地区は、今も純農村のたたずまいを残し、伝統とムラの歴史を大事に伝えている二十数軒の旧村で、庚申塔群や十九夜塔群をはじめとするムラの講の石造物が大切に守られ、さらに講による「石建（いしだて）」行事が今も続けられている稀有な集落である。

八千代市郷土歴史研究会の石造物調査グループは、当会平成 30 年度のテーマ「旧村下高野研究」の一環として、下高野地区のムラの石造物 94 基を調査した。

調査は、福蔵院（現 下高野公会堂）をはじめ下高野地区内の 13 か所で、2018 年 3 月 29 日より 9 月 13 日まで 7 回行い、筆者のほか、鈴木千代・畠山隆・菅野貞男・村田一男・牧野光男・藤村誠枝・宮井雄二・松柴慎吾・中島和子・斎藤淳・青田博之・小林詔三・櫻井マツ子・三橋俊一の会員が参加した。

今回は像容や形態、法量のほか、長文や人名多数の銘文も全て記録し、1 基ずつ調査票にまとめ、この調査データをもとに、道標表示のある石造物の行先地名の特徴とその位置について、また 32 基の女人講石塔の造立年の間隔と連続性、さらに庚申塔などの男性の講の石塔と造立の時が一致しているかについて考察した。

なお、この調査に際して貴重な参考資料をご提供くださり、さらに毎回、現地で丁寧にご教授いただいた下高野地区の小澤一雄氏に、心からの謝意を表します。

1. 調査した石造物の概要（内訳と所在地、先行研究）

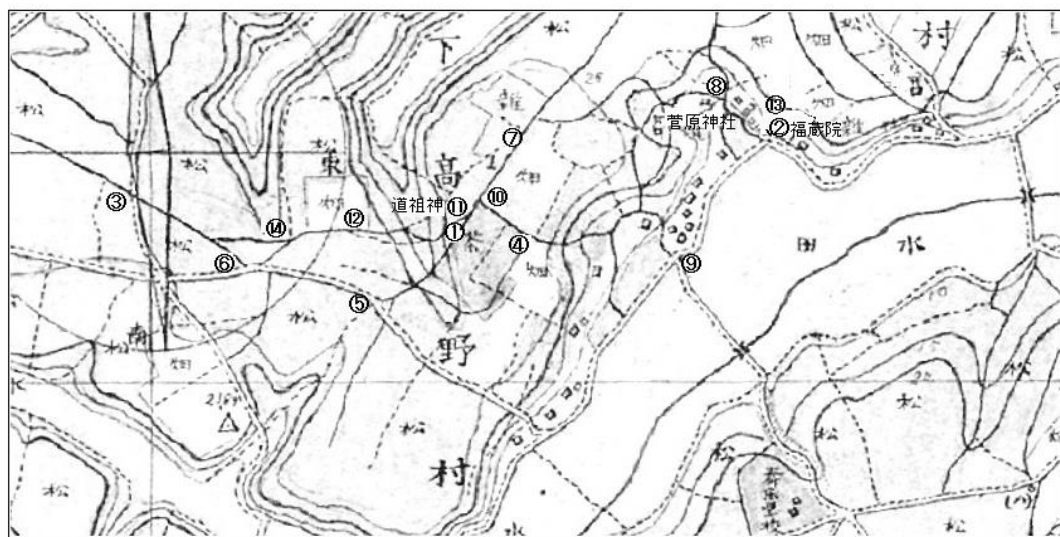
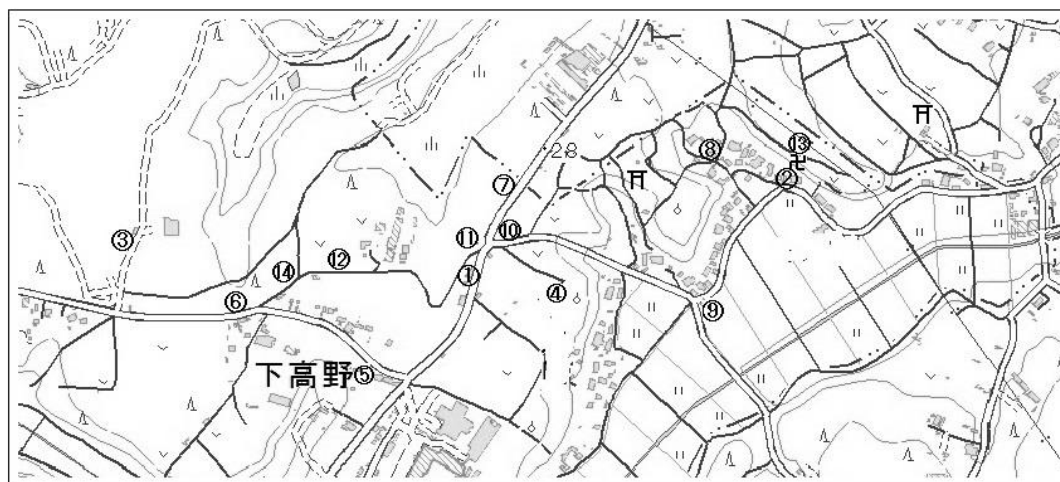
今回調査した石造物の種類の内訳は、庚申塔 24 基、女人講石塔（十九夜塔・子安塔）32 基、月待塔 2 基、出羽三山塔 10 基、秩父等観音霊場巡拝塔 5 基、四国等巡拝塔 2 基、富士講関連石造物 4 基、馬頭観音塔 7 基、その他 8 基の計 94 基である。

下高野の石造物について先行する研究報告として、『よなもと今昔』9 号（注 1）と、『八千代市の歴史 資料編』の「石造文化財」（注 2 以下『市史』と略記する）に簡略なデータの一覧表がある。本稿で調査した 94 基の石造物のうち、『市史』の表にあるのが 74 基、記載のない石造物は平成 3 年（1991）以降建立の 12 基を含む 20 基である。

石造物の所在地は、庚申塔は道祖神社の旧道向い（所在地①）、女人講石塔は福蔵院（②）、出羽三山塔は三山塚（⑫）に集中するが、道標付庚申塔などは旧道の分岐点などに分散していることから、新旧地図にその地点をプロットし、表 1 にまとめた。なお、旧地図は、「比較地図」（注 3）の明治初期の迅速測図に加筆した。

表1 下高野の石造物 所在地一覧 番号は地図（上は現在、下は明治初期の迅速測図）の番号

番号	所在地（字名 目印）	基数	内訳
①	中新山 道祖神の旧道向い	14	庚申塔 14（内道標付 1）
②	山越 福蔵院（現・下高野公会堂）	49	女人講 32 巡拝塔 7 富士講 2 庚申塔 1 他 7
③	庚申塚 ゴルフ場内	1	道標付庚申塔 1
④	新道台 旧ゲートボール場北東角	1	道標付庚申塔 1
⑤	中新山 大隅重機工事(株) 東角	1	道標付庚申塔 1
⑥	清水作 北新建設向いの山林路傍	1	道標付庚申塔 1
⑦	大久保 佐倉市との市境	5	道標付庚申塔 1 馬頭観音 3 他 1
⑧	天神 深山自動車向角	1	道標付庚申塔 1
⑨	町田 路傍	2	庚申塔 2（内道標付 1）
⑩	作畑 道祖神前の交差点路傍	2	庚申塔 1 道標 1
⑪	大久保 道祖神の脇と奥	5	月待塔 2 馬頭観音 3
⑫	大久保 三山塚	10	出羽三山塔 10
⑬	山越 福蔵院裏山	2	富士講 2
⑭	大久保 ゴルフ場境	(1)	道標付庚申塔 (1)（現在は②に移動）



2. 青面金剛像から道標付へ、そして今も石建てが続く下高野の庚申塔群

下高野の庚申塔は、表2に示した通り、享保12年（1727）建立銘石塔（I-1）の最古から、最新では平成26年（2014）銘（I-24）まで24基ある。

庚申塔は、庚申信仰に基づいて「庚申講」が建てた石塔で、庚申講は、60日目に巡ってくる「庚申」の夜、三尸虫が天帝に人の罪惡を告げてその人の寿命が縮まるという言い伝えから、これを防ぐために、青面金剛像を祀って読経や宴会をして徹夜するムラの講である。

江戸時代前期から近世を通して、関東の各村々では、多数の庚申塔が建立されているが、下高野では、江戸中期の享保から幕末の文久元年（1861）までが7基が残されている。そのうち享保12年と、宝暦8年（1758）銘（I-2）の2基は青面金剛像浮彫、2基は「青面金剛」を主尊とする文字塔、3基は「庚申（塔）」銘の文字塔であるが、安政5年（1858）の文字塔（I-6）は、篆刻の凝った字体を刻む。

これらの7基は、「下高野村絵図」（注4）にも描かれて小字名にもなっている「庚申塚」にあったといわれ、その後の近現代の開発で、現在の道祖神の旧道向かい側（所在地①）に移されたとみられる。

近現代の建立は17基、うち明治28年（1895）（I-8）から昭和40年（1965）（I-17）の9基は、道標を兼ねた庚申塔で、ムラ往還の分岐点などの要所に配置されている。明治時代になって政府により庚申塔も迷信として排除される傾向の中で、公共性のある道標機能を兼ねることにより、下高野では建立が継続されてきた。なお、道標に示す地名と機能についての考察は9.（1）で後述する。



①の庚申塔群

道標付庚申塔9基のうち、No. I-10の明治39年（1906）の塔は、現在、福蔵院境内に移されてある。『やちよの道しるべ』（注5）の「道標調査票 E09」の石塔で、この道標調査時の2001年までは所在地⑭の字大久保ゴルフ場境の路傍にあったが、赤みのある珍しい石材であることから、鉱物を学ぶ大学院生が来て一部を割って持ち去るという被害を受け、保全のために福蔵院へ移したとのことである。（小澤一雄氏談）

享保12年の最古の塔の造立は、女人講の十九夜塔の初出と同年月日である。近代も同時に建立することが多く、造立時期の考察は、9.（2）で後述するが、昭和33年からはムラ行事として十九夜塔と共同で、7年置きに石建てが継続されている。

昭和47年（1972）以降の庚申塔は、道しるべを記すことなく、簡素な角柱型となるが、7年おきの石建てが続き、次回も2021年の建立が予定されている。

表2 庚申塔一覧表

No.	所在地	造立年月日	西暦	像容	形状 (道標 No.)	銘文 (造立年月日略)
I 1	①	享保 12・10・吉	1727	青面金剛	駒型	下高野村講中十三人
I 2	①	宝暦 8・10	1758	青面金剛	笠付角柱型	下高野村講中
I 3	①	寛政 2・11・吉	1790		駒型	〈カーン〉青面金剛 講中
I 4	①	文化 6・11・吉	1809	(日月)	駒型	庚申 下高野村講中
I 5	①	文政 5・11・吉	1822		駒型	庚申塔
I 6	①	安政 5・11・吉	1858		山状角柱型	庚申塔 講中
I 7	①	文久元・3・吉	1861	(日月)	駒型	青面金剛王 當村願主傳右工門 村中
I 8	①	明治 22・4・吉	1889	(日月)	自然石	庚申塔 下高野村 構中
I 9	①	明治 28・3・吉	1895	(日月)	駒型 (E11)	庚申塔 当区講中 西米本城橋道 北先崎道 東青菅臼井道
I 10	②	明治 39・3・吉	1906	(日月)	駒型 (E09)	庚申塔 東先さき青すけ(佐くら)道 右米本いなり道
I 11	③	大正 2・3・吉	1913	(日月)	駒型 (E08)	庚申塔 下高野区中 西米本稻荷 南上高野 北保品渡船 東臼井
I 12	④	大正 9・3・吉	1920	(日月)	駒型	庚申塔 下高野講中 西米本いなり道 此方米本城橋道 東青菅臼井道
I 13	⑤	大正 15・3・吉	1926	(日月)	駒型	庚申塔 米本城橋道 上高野道 青菅臼井道
I 14	⑥	昭和 15・3・吉	1940	(日月)	駒型	庚申塔 下高野講中 北米本いなり道 東先崎青菅道 西米本城橋道
I 15	⑦	昭和 27・3・吉	1952	(日月)	角柱型 (E12)	庚申塔 下高野講中 此ノ方米本二至ル 此ノ方當區二至ル 北ノ方先崎二至ル
I 16	⑧	昭和 33・3・吉	1958		駒型 (E15)	庚申塔 北ノ方保品二至ル 西ノ方米本二至ル
I 17	⑨	昭和 40・3・吉	1965		駒型 (E14)	庚申塔 東先崎二至ル 正面志津二至ル 西大和田二至ル 下高野講中
I 18	①	昭和 47・3・吉	1972		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 19	⑨	昭和 54・3・吉	1979		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 20	⑩	昭和 61・3・吉	1986		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 21	①	平成 5・3・吉	1993		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 22	①	平成 12・3・吉	2000		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 23	①	平成 19・3・吉	2007		角柱型	庚申塔 下高野講中
I 24	①	平成 26・3・吉	2014		角柱型	庚申塔 下高野講中

				
I-1 享保 12	I-2 宝暦 8	I-3 寛政 2	I-6 安政 5	I-14 昭和 15

3. 下高野の女人講石塔群と今も続く十九夜講の石建て行事

(1) 北総と下高野の女人講石塔群の概要

下高野の石造物で最もインパクトの強い印象を与えるのは、福蔵院境内に、十九夜塔などの女人講の石塔が新旧 32 基二列に整然と並ぶ姿であろう。

ムラの女性たちが集まって、女人成仏や安産子育てを祈願し念仏や和讃を唱える「女人講」が、旧暦 19 日に開く講を「十九夜講」と呼び、「十九夜塔」はその信仰のあかしとして建立する石塔のことである。

江戸初期の北総の女人講では、地藏菩薩や聖観音を主尊とするさまざまな念仏講の石塔が建てられ、下高野の東隣の先崎では「庚申」銘をもつ慶安 3 年（1650）の、西隣の米本でも「女房衆念仏講」の銘を持つ寛文 10 年（1670）の地藏坐像が子育て地藏として信仰されるなどしたが、しだいに如意輪観音像を主尊とする十九夜塔が主流となる。

特に 17 世紀末の元禄のころから十九夜塔は女人講の石塔として関東北東部を席卷し、幕末までに北総では二千基ほどの十九夜塔が建立されていった（注 6）。また北総では、江戸後期から子安神を祀る石祠や子安像を刻む石塔が増えてきて、幕末以降は如意輪観音像の十九夜塔に変わって、「子安講」が建立した子安像塔が主流になっていく（注 7）。

福蔵院境内の女人講石塔 32 基を表 3 に示した。下高野での最古は、「享保 12 年 10 月吉日」（1727）に建てられた後列左奥の十九夜塔（Ⅱ-1）で、浮き彫りされた二臂如意輪観音像の深い瞑想を表すその姿はのびやかで洗練されている。

この塔は、庚申塔の初出（Ⅰ-1）と同じ年月日に造塔され、「下高野村十九夜講同行十八人」の銘をもつ。この「十八人」の銘は、この頃に下高野村を構成した 18 軒の各家を代表する女性の人数とみられ、女人講石塔群の背後の不動堂墓地に祀られる江戸初期からの参り墓を構成する旧家 18 軒の単位と一致する。（小澤一雄氏談）

最新は平成 26 年（2014）（Ⅱ-32）で、これら女人講 32 基の石塔のうち、26 基には「十九夜」の銘が刻まれてあり「十九夜塔」に分類される。この 32 基すべてに、如意輪観音像か子安観音像の像容が丁寧に浮き彫りされ、簡略な文字塔は 1 基もない。

像容は、江戸期 11 基中、天保 10 年（1827）の塔（Ⅱ-7）の 1 基が例外的に子安観音像を刻み、他の 10 基は全て如意輪観音像である。享保とそれに続く宝暦 6 年（1756）の塔（Ⅱ-2）の二臂如意輪観音像は左手を膝に下げた姿で、安永 7 年（1778）の塔（Ⅱ-3）から左手に蓮華を持つ姿に変わっていく。思惟する顔の傾きは徐々に小さくなり、幕末の文久 4 年（1864）の塔（Ⅱ-11）以降では、ほぼ直立する。

また文化 3 年（1806）の塔（Ⅱ-4）から、「十九夜」に「女人講中」（または「女人中」）の銘が記すのが通例となり、さらに安政 2 年（1855）の塔（Ⅱ-10）からは、世話人 2 名（現代は 4 名）の男性名が記される。おそらく幕末から、十九夜塔の建立がムラ行事に位置付けられたからであろう。

表 3 女人講石塔（十九夜塔・子安塔・如意輪觀音像塔）

№		所在地	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文 (造立年月日略)
II	1	②	享保 12・10・吉	1727	如意輪觀音	光背型	下高野村十九夜講同行十八人
II	2	②	宝暦 6・10・19	1756	如意輪觀音	光背型	〈サ〉十九夜講 同行十八人下高野村
II	3	②	安永 7・10・吉	1778	如意輪觀音	光背型	奉造立十九夜講中二十人
II	4	②	寛政 6・11・吉	1794	如意輪觀音	光背型	當村 女人講中
II	5	②	文化 3・2・吉	1806	如意輪觀音	光背型	十九夜 女人講中
II	6	②	文政 3・11・吉	1820	如意輪觀音	光背型	○夜 ○中 セ八人 深山治右門 立石傳 右門
II	7	②	文政 10・11・19	1827	如意輪觀音	光背型	十九夜 講中 廿二人 願主 小沢定右工 門 深山源右工門
II	8	②	天保 10・11・吉	1839	子安觀音	光背型	女人中
II	9	②	弘化 4・11・吉	1847	如意輪觀音	光背型	十九夜女人講中 十七人
II	10	②	安政 2・3・19	1855	如意輪觀音	光背型	十九夜 女人講中廿人 世八人 立石傳右 工門 同藤右工門
II	11	②	文久 4・2・吉	1864	如意輪觀音	光背型	十九夜 女人講中 世八人 新右工門 傳 右工門

 II-1 享保 12	 II-2 宝暦 6	 II-3 安永 7	 II-4 寛政 6
 II-7 文政 10	 II-8 天保 10	 II-10 安政 2	 II-11 文久 4

II	12	②	明治 6・5・吉	1873	如意輪観音	光背型	十九夜 女人中 世八人 小沢三右工門 立石所左工門
II	13	②	明治 13・4・吉	1880	如意輪観音	光背型	十九夜 女人講中
II	14	②	明治 21・4・吉	1888	如意輪観音	光背型	〈カン〉十九夜 當村女人講中 世話人 立石博右工門 深山新之助
II	15	②	明治 28・3・吉	1895	如意輪観音	光背型	十九夜 女人中
II	16	②	明治 33・3・吉	1900	如意輪観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 小沢彦七 深 山竹次郎
II	17	②	明治 39・3・吉	1906	如意輪観音	光背型	十九夜 セ八人 深山晴吉 立石政吉
II	18	②	大正 2・3・吉	1913	如意輪観音	光背型	〈サ〉十九夜 女人講中 セ八人 立石佐 傳治 立石鉄之助
II	19	②	大正 9・3・吉	1920	子安観音	光背型	女人講中 世話人 立石治郎吉 深山幸介
II	20	②	大正 15・3・吉	1926	如意輪観音	光背型	十九夜 女人講中 セ八人 小澤慶介 立 石藤作
II	21	②	昭和 8・3・吉	1933	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 深沢理 立石 元吉
II	22	②	昭和 15・3・吉	1940	子安観音	光背型	〈ア〉女人講中 世話人 立石越 立石光
II	23	②	昭和 27・3・吉	1952	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 小澤登 立石茂雄 立石勇 立石實
II	24	②	昭和 33・3・吉	1958	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 深山忠司 立石一五郎 深山新一 立石政明
II	25	②	昭和 40・3・吉	1965	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 立石忠次 深 山政吉 立石吉 立石春雄
II	26	②	昭和 47・3・吉	1972	子安観音	光背型	女人講中 世話人 小澤與助 立石清 立 石豊 小澤武雄
II	27	②	昭和 54・3・吉	1979	子安観音	光背型	十九夜 女人講申 講中二十二人 世話人 深山武夫 深山寛 立石完雄 立石善一郎
II	28	②	昭和 61・3・吉	1986	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 植村好輝 立 石治夫 深山孝一
II	29	②	平成 5・3・吉	1993	子安観音	光背型	女人講中 世話人 松本千神佐 立石正博 深山茂雄 小澤一雄
II	30	②	平成 12・3・吉	2000	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 立石博 立石 輝雄 立石行 立石正一
II	31	②	平成 19・3・吉	2007	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 小澤盛裕 深 山哲夫 小澤元雄 深山進
II	32	②	平成 26・3・吉	2014	子安観音	光背型	十九夜 女人講中 世話人 立石梅夫 立 石眞二 立石良二 立石高



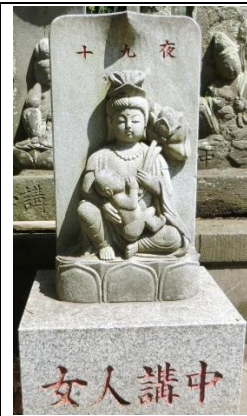
II-16 明治 33



II-20 大正 15



II-22 昭和 15



II-32 平成 26

北総では、江戸後期から主尊が如意輪観音像から子安像（子安観音・子安神像）へと、女人講の名も「十九夜講」から「子安講」へと変わっていくが、下高野では近代になっても如意輪観音像を主尊とする「十九夜塔」が、大正2年（1913）の塔（Ⅱ-18）まで続く。大正9年（1920）には子安観音像、大正15年（1926）にまた如意輪観音像をと逡巡しつつも、昭和8年（1933）からは、全て子安観音像に変わるが、下高野の十九夜講は子安講に名称変更することなく、若い子育て世代の講として、そのまま現代に至り、石塔に刻まれる銘も「十九夜」である。北総の他地区と同様に、天保10年に子安塔に切り替わる気配が一時的に見られるが、十九夜講の名称と如意輪観音像にすぐに戻ったのは、伝統を重んじる下高野の特徴だろう。

造塔年の間隔は、昭和の太平洋戦争下の時代を除くと、幕末から5～9年間隔となり、昭和40年（1965）からは、庚申塔の造立と期を合わせて、7年間隔が守られるようになる。整然と並ぶ女人講石塔32基の姿は、江戸中期から現代にいたる印旛地域の如意輪観音像と子安像の像容の変遷を、切れ目なく一か所で把握できる石塔群であり、特に、近現代の子安像はこの地域の代表的な像容を反映している貴重な資料といえる。

（2）下高野の十九夜講とその石建て行事

北総の子安講と子安塔造立が盛んだった地区でも、第二次ベビーブームが過ぎた昭和の終わりごろには都市化と少子化で各地の子安講も下火となり造塔もまれになるが、下高野の十九夜講とその石建て行事は、しっかり続けられた。

そして現在に続く貴重な民俗事例として記録され、昭和61年（1986）の石建てに取材した報告が『史談八千代』（注8）や『よなもと今昔』（注9）に、さらに平成5年（1993）の石建て後の報告が川戸彰氏により『千葉文華』（注10）に掲載され、またWeb上でも最新の平成26年（2014）の石建てと札貼りのルポがアップされて、多数の写真や動画で見ることができる（注11・12）。

これらの記録によると、十九夜講の講員は平成5年当時で20名前後（注10）、平成26年の石建て時は6人（注12）で、結婚した若い女性で構成される。平成5年のころの講は、福蔵院で、年6回3・4・7月の19日と9月の月初め、1・11月の酉の日に開かれ、招待する方・される方に集落を二分し、半村交互に当番を勤める。講員の家から米を集め、調理して昼食と夕食の「人参御飯」を作り、人参御飯とお茶を寺の本尊の阿弥陀如来と最新の十九夜塔にお供えする。夜は招待される側の世話人の旦那二人も参加して、「無尽（くじ）」が行われ、酒盛りと夕食、談笑となる。男衆が招かれるのは、石建ての際の資金の面倒を見てもらうからとのこと。

石建ては、費用も含め、庚申塔建立と共に、ムラ行事とし3月3日に行われてきた。平成26年は、3月1日に餅つきと石屋の都合で新塔の設置、2日に石建て行事、3日に札貼りが行われた。餅つきは、60kgの糯米をついて、各家と来賓用、新しい十九夜塔

と庚申塔に供える重ね餅と餅まき用の餅 650 個を作る。石建て行事は、十九夜塔に餅と塔婆を供え、午後 1 時から念仏講による約 45 分の石建て念仏、前回の平成 19 年からはじまったという十九夜塔の除幕式、広場での餅まき（お菓子も撒かれる）と続き、来賓を交えての石建て披露の直会、そして講員の宴会が午後 9 時まで行われた。札貼りは、午前から 12 等分した半紙に「十九夜講中 下高野」と書いて御札を作り、新しい十九夜塔に貼ってから先崎や青菅や井野の寺の十九夜塔に札貼りに行き、戻って昼食となる。

少子化で旧家の若い女性と子どもが少なくなっている農村地域の現状は、下高野も同じであるが、連綿と十九夜講による石建てが続けられる背景には、男性の世話人によるバックアップ体制と、庚申塔の石建と共同のムラ行事との位置付けがあること、そして、「このムラではお産で死んだ人はいない」という子安様のご加護（小澤一雄氏談）を信仰しているからであろう。



福蔵院境内の女人講石塔群

4. 月待塔（二十六夜塔・二十三夜塔）

道祖神脇を米本への旧道入口に進むと左手（⑪）に、二十六夜塔（Ⅲ-1）と二十三夜塔（Ⅲ-2）がある。それぞれ二十六夜と二十三夜の月の出を待ちながら、勤行と飲食を共にした月待の講の供養塔である（表 4）。

二十六夜塔は、八千代市内では大和田新田上区に近現代の女人講による塔があるが、事例は少なく、愛染明王を主尊とすることから、染物業者の信仰もあり、また明け方近く東天に細い三日月が上がる姿が弥陀三尊に見えろといい、江戸後期に「江戸の六夜待」として流行した月待信仰の名を借りた男たちの夜遊びの場でもあった（注 13）。

下高野のこの塔には、「二十六夜 文化十二亥年十一月廿六日」の銘に加えて台石に「若者中」の銘があり、若い男性の講であったことがわかる。

二十三夜塔は、勢至菩薩を主尊として、まれに女人講の場合もあるが、多くは江戸初期から男性の講により建てられる月待塔である。下高野の安政 2 年 2 月（1855）建立の二十三夜塔（Ⅲ-2）には、「當村講中」の銘がある。

この二つの月待塔を、表 13 に示したように、女人講の石塔の造立年月日と対比させると、二十三夜塔は、同年 3 月 19 日建立の十九夜塔とほぼ一致する。従って下高野の二十三夜塔を建てた「當村講中」は男性の講であった可能性が強い。

表 4 月待塔（二十六夜塔・二十三夜塔）一覧表（像容＝すべて無し）

No.		所在地	造立 年月日	西暦	形状	銘文（造立年月日略）
Ⅲ	1	⑪	文化 12・11・26	1815	駒型	二十六夜塔 若者中
Ⅲ	2	⑪	安政 2・2・吉	1855	山状角柱型	二十三夜塔 當村講中

表 5 出羽三山塔一覧表（像容＝すべて無し）

No.		所在地	造立 年月日	西暦	形状	銘文 (造立年月日略)
Ⅳ	1	⑫	寛政 6・11・吉	1794	駒型	(サ・キリーク・サク) 湯殿山 月山 羽黒山三所大権現 講中 / 下高野村 先崎村 青菅村 小竹村 上高野村
Ⅳ	2	⑫	文久 3・3・吉	1863	駒型	湯殿山 月山 羽黒山 當村講中 / 小沢〇〇 小沢定右 工門
Ⅳ	3	⑫	(参拝年月日 大正 7・7・20)	1918	自然石	月山神社 羽黒山 湯殿山 / 深山晴吉 立石政吉 全佐傳治 深山治郎吉 全幸介 立石安太郎
Ⅳ	4	⑫	(参拝年月日 昭和 15・7・21)	1940	自然石	月山大神 羽黒山大〇 湯殿山大〇 / 参拝記念 深山慶輔 深山理 立石仁輔 深山理 立石仁輔 立石幸輔 深山隆 小澤倉吉 立石徳太郎 松本恒司
Ⅳ	5	⑫	(参拝年月日 昭和 28・7・25)	1953	自然石	月山神社 羽黒神社 湯殿神社 / 参拝記念 立石赳 深山浦治 深山敏 深山新一
Ⅳ	6	⑫	昭和 44・11・吉	1969	平石型	月山大神 羽黒山大神 湯殿山大神 / 昭和四十四年七月二十六日参拝 深山忠司 立石一五郎 小澤興助 深山政吉 立石卯三郎 立石政明 立石吉 立石春雄 深山武夫
Ⅳ	7	⑫	昭和 49・7・吉	1974	平石型	月山 羽黒山 湯殿山 / 昭和三十四年七月参拝 立石政晴 立石茂雄 立石豊 深山泰 深山寛
Ⅳ	8	⑫	昭和 51・3・吉	1976	平石型	月山大神 羽黒山大神 湯殿山大神 / 昭和五十年七月十四日参拝 参拝者 立石完雄 立石善一郎 立石治雄 深山茂雄 小澤武雄 植村好輝 佐藤馬吾吉 船橋市深山和夫 習志野市小野唯一 / 昭和五十年七月十一日上高野二十三名と合流し三十二名で京成勝田台駅に集合夜行で新潟へ 十二日佐渡泊り 十三日新潟より貸切バスで羽黒山宮田坊泊り 十四日三山に登拝し湯の浜温泉泊り十五日最上川舟下り鳴子温泉泊り十六日松島遊覧仙台空港まで貸切バス空路羽田へ貸切バスで全員無事帰宅／布佐大塚石材
Ⅳ	9	⑫	昭和 59・11・吉	1984	平石型	月山大神 羽黒山大神 湯殿山大神 / 昭和五十九年七月十五日参拝 松本千神佐 深山孝一 立石正博 小澤一雄 立石傳 立石輝雄 深山孝夫 立石行 立石正一 深山一 小澤元雄 立石正隆 深山梅夫 深山昇 深山信夫 立石邦雄 / 昭和五十九年七月十三日 下高野十六名 上高野十六名と合流し 東洋観光で出発す 鳴子温泉泊り 十四日最上川舟下り羽黒山参拝宮田坊泊り 十五日 雨天強行し 月山湯殿山を参拝 上の山温泉泊り 十六日 蔵王エコーライン観光 全員無事帰宅
Ⅳ	10	⑫	平成 24・10・吉	2012	平石型	月山大神 羽黒山大神 湯殿山大神 / 平成二十四年七月十五日参拝 立石眞二 立石良二 立石高 立石利明 深山政男 松本光代 立石圭一 深山邦彦 立石篤史

5. 出羽三山塔

道祖神から米本方面への旧道を進み、森林を抜けた畑の手前に三山塚(⑫)がある。ここには、出羽三山塔 10 基(表 5)が祀られ、その前には、年 2 回、2 月 15 日の「天道念仏」前日の 14 日の「ボンテン飾り」と、7 月の「奥州講」の際に 6 本のボンテンが飾られる。(「3-2 下高野のボンテン飾りと天道念仏」参照)

出羽三山塔は、江戸時代は湯殿山を中心に月山・羽黒山の三所大権現の供養塔として、明治の神仏分離令以後の近現代は、月山・羽黒山・湯殿山の三神社を登拝した記念碑として建立される石塔である。

下高野を含め、関東の各村々では、出羽三山を登拝する「奥州参り」が盛んで、家を継ぐ男は一生に一度は、出羽三山に登ることが習わしとされてきた。

下高野の最古の出羽三山塔は、寛政 6 年(1794)の塔(IV-1)で、八千代市内では、出羽三山銘のある供養塔として 4 番目に古い。この塔は、銘によれば「下高野村・先崎村・青菅村・小竹村・上高野村」の五村の講中により建立されており、江戸中期のころは地域的な広がりをもった講であったと推定される。

文久 3 年(1863)の塔(IV-2)は「當村講中」銘、当時まだ厳しかった登拝を成し遂げたのであろう「小沢定右エ門」他一名の名がある。

近代からは、登拝記念碑として、大正 7 年(1918)参拝の塔(IV-3)から、平成 24 年(2012)の塔(IV-10)まで 8 基が建てられ、約十数年の間隔で 7 月半ば過ぎに登拝を行い、帰ってから翌年春までには石建てをしている。(昭和 39 年の 10 年後は例外)

昭和 51 年(1976)塔(IV-8)と昭和 59 年(1984)塔(IV-9)には、旅の行程が記されており、上高野の講員と合同で貸切バスなどを使って、出羽三山のほか東北各地を遊覧する旅の姿がみてとれる。

6. 秩父等観音霊場・四国遍路・富士講の巡拝塔

(1)「小島泰翁書」の百観音供養塔

福蔵院(②)には、明治 19 年(1886)銘の「西国秩父坂東」の百観音供養塔(V-1)と、現代の「秩父善光寺参拝記念」塔 4 基(V-2~5)がある。(表 6)

「供養塔」の文字が個性的でひときわめだつ明治 19 年塔には、「小島泰翁書」の銘と落款が刻まれている、小島泰堂(「5 郷土の偉才 小島泰堂」参照)の揮毫であることがわかる。

小島泰堂は佐倉の青菅の名主で、江戸でも教育者として活躍した偉才。晩年はこの地域で教育文化や茶園設立などの大きな功績を遺している。裏面には「明治十九丙戌歳春華見建之」の銘。「歳」の字は異体文字、「春華見」は花見月の三月のことであろう。

泰堂は、他にも上高野の「三省翁陰記」碑の撰文書(注 14)、青菅の「月讀尊」碑、萱田飯綱神社の「普門品供養塔」の揮毫も行っている(注 15)。

表 6 秩父等観音霊場巡拝塔（像容＝すべて無し）

No.		所在地	造立 年月日	西暦	形状	銘文 (造立年月日略)
V	1	②	明治 19・3・	1886	自然石	西国秩父坂東供養塔 小島泰翁書 / 當村 立石與惣○ 深山源右衛門 立石傳右衛門 / 明治十九丙戌歳春華見建 之 / サギ沼石工 音五郎
V	2	②	昭和 47・6・吉	1972	自然石	秩父善光寺参拝供養塔 / 昭和四十七年三月 立石いち 立石春枝 立石とく子 深山とし 深山タケ 小澤澄子 深山ふじ 立石とめ子 立石良子 立石孝子
V	3	②	昭和 47・11・吉	1972	自然石	秩父善光寺参拝記念 / 昭和四十七年八月八日 深山忠司 深山新一 小澤與助 立石政明 立石 吉 小澤米治郎 深山武夫 深山志ん 深山シン 立石正子 立石サタ 立 石志ま 立石民 小澤いち 立石こう 深山節子 植村節 子 深山榮子
V	4	②	平成 3・7・吉	1991	平石型	秩父善光寺参拝記念 / 平成二年七月秩父参拝 平成二年 七月善光寺参拝 / 松本ふみ江 立石松枝 立石さと 深 山貴子 小澤静子 立石弘子 深山兎美子 深山好枝 立 石千代子 立石光子 立石和代 深山好子 立石典子 小 澤純子
V	5	②	平成 29・9・吉	2017	平石型	秩父善光寺参拝記念 平成二十五年七月秩父参拝 平成二 十八年十一月善光寺参拝 / 立石美代子 深山初枝 立石 肇子 深山晃子 立石展子 立石則子 松本美和 立石恵 理花 立石博子 立石夏子

表 7 四国等巡拝塔

No.		所在地	造立 年月日	西暦	像容	形状	銘文 (造立年月日略)
VI	1	②	昭和 2・3	1927	大師像	丸彫型	四國巡拝記念 深山春吉 立石安太郎 深山幸介
VI	2	②	昭和 33・3	1958		自然石	坂東四国参拝記念 昭和三十二年九月二十一日霊地 坂東ノタクシーニテ遍路ス 深山浦治 深山敏 布 佐大塚石材



Ⅲ-1 文化 12



Ⅳ-1 寛政 6



V-1 明治 19



VI-1 昭和 2

（２）女性たちの秩父・善光寺参りの巡拝塔

佐倉市とその周辺の地区では近代から、子安講を卒業した女性たちが秩父三十四観音霊場を巡る「秩父講」が、男たちの出羽三山巡拝に呼応するように盛んになり、今や、寺院や集会所に「秩父塔」が林立する姿も珍しくない。

現代の下高野でも、昭和 47 年（1972）銘が 2 基（V-2・3）あり、秩父と善光寺の参拝が 3 月と 8 月に行われ、それぞれ参拝記念の供養塔を建立している。平成からは、平成 2 年 7 月に秩父と善光寺を参拝して翌年（1991）に石塔（V-4）を、平成 25 年は 7 月に秩父、平成 28 年 11 月に善光寺を参拝して平成 29 年に（2017）の石塔（V-5）を、建立している。

（３）四国遍路の記念塔

さらに福蔵院には、表 7 のとおり、坂東三十三観音霊場と四国の遍路を行った参拝記念塔（VI-2）が昭和 33 年（1958）に建立されている。また大師堂内の丸彫の昭和 2 年銘（1927）大師像（VI-1）には、「四国巡拝」をおこなった 3 名の名が刻まれている。なお、大師堂については、本稿 8.（2）に記す。

（４）富士講の石造物

福蔵院の裏から険しい山道を登って台地上に出たところに、嘉永 2 年（1849）銘の「仙元宮」の石祠（VII-1）と、その登山道の中ほど、つづら折りに曲がるところに文久 2 年（1861）銘の「小御嶽石尊」塔（VII-2）が祀られている。この 2 つの塔に至る山道は、7 月 15 日の「ミヤナギ」の際に、草木の伐採と清掃が行われる。

また福蔵院境内のこの登山の入り口には、明治 33 年（1900）奉納の手洗石と、昭和 3 年（1928）年建立の富士登山の記念塔があり、近代も富士講が盛んであった。（表 8）

富士塚になぞらえた登山道の中腹の木の根元に食い込むように祀られている駒形の「小御嶽石尊」塔は、相模の阿夫利神社の祭神も「石尊大権現」であるので、大山講の石塔と紛らわしく、この石塔も『市史』一覧表で「大山講」に分類されている（注 2）が、「小御嶽 石尊大権現 大天狗 小天狗」の銘から、富士山五合目の小御嶽神社の供養塔で、各地の整備された富士塚では主に五合目に配置される。八千代市内では浅間社や富士塚などに 8 基あり、下高野のこの石塔は市内では最古である（注 16）。

この「小御嶽石尊」塔で注目されるのは、正面の下部分に右から横書きで「女人講中」と刻まれていることである。木花咲耶姫を祀る富士信仰は、安産・子育てを願う子安信仰と不可分で、八千代市内でも 7 月 15 日の稲毛の浅間神社大祭に新生児や七歳児をお参りさせる風習が最近まで続いていた。下高野では、稲毛の浅間参りの前に、女性たちが、ミヤナギできれいになった道をこの「小御嶽石尊」塔の所まで登って、安産子育ての祈願をしていたという。

表 8 富士講関連石造物一覧表

No.		所在地	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文 (造立年月日略)
VII	1	⑬	嘉永 2・2・13	1849	三猿	石祠	仙元宮 當邑講中／世八人 立石藤右工門 立石傳左工門
VII	2	⑬	文久 2・2・吉	1861		駒型	小御岳 石尊大権現 大天狗 小犬狗 女人 講中／當村 立石傳左工門 同○左工門隠居 同○○○○○
VII	3	②	明治 33・2・26	1900	(○に不二の印)	手洗石	奉納 仙元大神 大願成就／当村願主立石傳 左工門
VII	4	②	昭和 3・3・吉	1928	(山に割菱の印)	自然石	登山記念／立石榮衛 全茂雄 全光 全仁輔 全良助 全實 全政清 全勇 全起／小沢倉 吉 全登 全節 深山隆 全敏 全理 全浦 治 全慶助 全金造 / 世代 一 立石徳兵 エ 全利吉 全石太郎／二 全藤作 全鉄之 助 小沢元治郎／三 立石良郎 全徳太郎 全 安太郎／世話人 徳兵エ 立石徳太郎 庄左工門 全藤作 所左工門 全元吉



表 9 馬頭観音・獣魂塔

No.		所在地	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文 (造立年月日略)
VIII	1	⑦	文化 6・11・18	1809	馬頭観音	丸頭型	立石傳右工門 同八郎右工門 同角右工門
VIII	2	⑪	天保 4・	1833		駒型	馬頭観世音
VIII	3	⑪	明治 19・11・7	1886		丸頭型	馬頭観世音 小澤元治郎
VIII	4	⑦	昭和 13・12	1938		丸頭型	馬頭観世音 施主 当区 小澤三右工門
VIII	5	⑦	昭和 18・10	1943		丸頭型	禽魂塔 小沢登 建之
VIII	6	⑦	年欠			駒型	馬頭観世音 小沢氏
VIII	7	⑪	年欠			駒型	馬頭観音

7. 馬頭観音塔と「禽魂塔」

馬頭観音は変化六観音のひとつで、その像は憤怒の相が多く、衆生の無智・煩惱を排除し諸悪を毀壊する菩薩として信仰されたが、民間信仰ではその「馬頭」という名から馬の守護仏、さらにすべての畜生類を救うとされて、その石仏の多くは路傍やソウマンド（馬・動物の墓）に供えられる。

下高野地区の馬頭観音塔は、表9の通り、宇大久保の共同墓地先の佐倉市先崎との市境の路傍（⑦）に3基、道祖神の脇（⑪）に3基ある。

最古は、市境の文化6年（1809）銘に二臂で印を結ぶ柔和相の馬頭観音像塔（Ⅷ-1）で、かなり風化していたが、拓本を採って「立石傳右エ門 同八郎右エ門 同角右エ門」の銘が確認できた。「角右エ門」は石造物では見慣れない名であったが、寛延4年（1751）の「持高銘々帳 下高野村」（注17）にその名がある。

また市境には、「獣魂碑」に分類される石造物として、昭和18年（1943）「禽魂塔」銘の供養塔（Ⅷ-5）がある。「禽」は鳥類の総称で、建立者は養鶏を営んでいたのであろうか。昭和期の八千代市内では牧畜や酪農が盛んだったことから、「牛魂碑」などの獣魂碑が12基記録されている（注2）が、「禽魂」を供養する石塔は唯一である。

なお、市境⑦の佐倉市側には、先崎の馬頭観音塔群が下高野の石塔群に接して並んでいる。その中では宝暦七年銘の馬頭観音の像容は、憤怒相六臂の迫力ある姿である。この地点⑦は、先崎と共同のソウマンドと思われる。

道祖神脇の3基を含む他の馬頭観音塔5基は、簡素な文字塔である。江戸時代の絵図（注4）では、上高野との境近くに「駒塚」の記載があり、確証はないが、道祖神脇の3基は開発のため、「駒塚」から移動したとも考えられる。

8. その他の調査した石造物

ムラの講に関連する石造物のほか、この地域の信仰や暮らし、歴史を知るための石造物を調査し、表10に示した。（神社祭祀の石造物は「2 下高野の神社と寺院」を参照のこと）

（1）六地藏と「かっぱらい地藏」

地藏菩薩の像塔は、衆生を救う仏として広く信仰され、寺や墓地入口に造立されたり、「〇〇地藏」の伝承を伴ったりと、庶民に最も親しまれている石仏である。地藏像塔は、単立のほか、六道を輪廻する亡者それぞれを6種の地藏が救うとして、合掌のほか、蓮華、錫杖、香炉、幢、数珠、宝珠などの持物を持つ6体の「六地藏」がある。

福蔵院の墓地入り口に並んでいる六地藏（Ⅸ-1）は、昭和3年（1928）に「下高野區講中」が造立した銘と、この時期独特の像容がきれいに残っている。

また、福蔵院の入口の大樹の根元には、永年の歳月に風化した2体の地藏像が佇んで

いる。左の小像塔（IX-2）は小澤定右エ門の銘。年銘はこれにも、右の顔が損傷した像塔（IX-3）にもない。お盆の余った供物や花を、この地蔵に上げることから「かつばらい地蔵」と呼ばれ、安産や健康長寿などいろいろなご利益があるという。（小澤一雄氏談）

（２）千葉寺十善講第 56 番の大師堂に残された銘を読む

福蔵院境内には創建不明とされる 2 棟の大師堂、墓地内には不動堂 1 棟が建っている。いずれも半間四方の小堂である。不動堂は昭和 59 年（1984）に再建された三代目で、ここにかけられていた「安政四年正月」銘の鰐口が伝わっている。（小澤一雄氏談）

下高野の 2 棟の大師堂は、四国八十八カ所の「泰山寺」の写しで、千葉寺を起点に千葉市・四街道市・佐倉市と八千代市の東部の 88 か所札所を巡礼する「千葉寺十善講」の第 56 番札所として、現在も春に、マイクロバスで巡礼する講を迎える（注 18）。

左側の大師堂内には、2 基の弘法大師の丸彫石像が安置されていて、右の像（IX-4）は無銘。左の像（VI-2）には、「昭和二年三月四國巡拝紀念 深山春吉 立石安太郎 深山幸介」の銘がある。木製の奉納額が 2 枚懸っていて、手前の額には「新四国五拾参番 下高野福蔵院 皆人の参りて頓て泰山寺 来世の引導頼み置きつつ 明治廿九年三月十七日 新立堂」、奥の額には「奉納 ありがたや志こく霊場おさめけり 大師のりやくのちの世までも 昭和三年三月二十一日 当区深山氏」と記されてある。

右側の大師堂にも木製奉納額があり、銘文は「第五十六番 みなひとのまへりてやがてたいさんじ らみせのいんどうたのみおきつゝ 立石仁助」とある。堂内の弘法大師の丸彫石像（IX-5）も無銘であるが、堂の土台石（IX-6）に銘が刻まれてあり、正面には「四國第五十六番 豫洲泰^山寺 下高野區 福蔵院」とあった。左面には多数の人名と奉納金額が彫られているが、風化崩落していて、「金[]門」や「金一円五^十銭[□□]」などが断片的に読めただけで、残念ながら建立年月日などは不明であった。

これら奉納額等から、大師堂は明治 29 年（1896）には創建されていて、昭和 2 年（1927）銘の四国巡礼記念の大師像と共に、翌年の昭和 3 年にもう 1 棟増堂されたかもしれない。その後も修理改築され、現在も大事に維持されて、春の巡礼団をあたたく迎えている。

（３）道標と記念碑

そのほか下高野には、神仏の信仰対象以外の石造物として、立石傳左エ門家屋敷内の小島泰堂「泰楽文園」碑（「5 郷土の偉才 小島泰堂」参照）、「米本いなり道」道標（IX-7）と、土地改良竣工記念碑（IX-8）がある。

下高野の道標 10 基中 9 基が庚申塔を兼ねているが、道祖神の交差点向かい側にあるこの道標は、『八千代の道しるべ』（注 5）E13 の「米本稻荷」を示す「参詣用道標」である。この年欠であるが、変体仮名を使用し、また「当區」とあることから、明治中期ごろの道標と推測される。この道標の示す方向などについては、9.（1）で後述する。

表 10 その他の石造物

No.	所在地	造立年月日	西暦	像容（種類）	形状 (道標No.)	銘文 (造立年月日略)
IX 1	②	昭和 3・12・吉	1928	六地藏	光背型	下高野區講中
IX 2	②	年欠		地藏像	光背型	小澤定右工門
IX 3	②	年欠		地藏像	光背型	
IX 4	②	年欠		大師像	丸彫型	
IX 5	②	年欠		大師像	丸彫型	
IX 6	②	年欠		(堂の台石)		四國第五十六番 豫洲泰○○ 下高野區 福蔵院 / 金 [] 門・・金一円・・
IX 7	⑩	年欠		(道標)	駒型 (E13)	此方米本いなり道 当區 立石傳右工門 右志もかうや臼井さくら道 左ほしな道
IX 8	②	平成 7・2・吉	1995	(記念碑)	平石型	(表) 下高野土地改良事業共同施行/記念碑 / 八千代市長
(裏上) 祝竣工(暗渠工事)工事概要 / 工期自昭和 57 年 至昭和 59 年 地域 下高野 / 面積 15.5ha 総工事費 34,450,000 円 / 請負業者 市原建設株式会社/特別協力 千葉県 八千代市 / (裏下) 下高野 立石豊 深山進 立石清 深山孝一 深山茂雄 深山孝夫 立石治夫 小沢米治郎 立石善一郎 立石辰夫 立石輝雄 深山寛 深山仁 小沢与助 立石たみ 立石行 松本千神佐 / 下高野共有地 上高野 桜井昇 藤代清 能勢勇 上高野原 佐久間一匡 花島秋良 大山美好 / 米本 桜井五郎 青菅 三門清一 先崎 友野欣一郎 友野高行 柏井 斉藤立雄 / 田喜野井 加藤一雄 役員 第一委員長 立石春雄 会計 小沢武雄 第二委員長 立石完雄 会計 立石傳 / 創業六代 大塚石材						
						
IX-1 六地藏 (昭和 3)				IX-7 道標		
						
IX-2・3 「かつばらい地藏」				IX-8 記念碑 (平成 7)		
						
IX-6 右側大師堂土台石正面				IX-6 左面		

下高野には、他地区に比べ近現代の記念碑は少なく、今回は最後に、福蔵院にある平成 7 年（1995）建立の土地改良竣工記念碑を記録した。昭和 57 年（1982）から昭和 59 年に至る下高野土地改良事業の概要と事業に係わった下高野地区の 21 人と役職、共有地の近隣の関係者 12 人の氏名が列挙されており、旧村下高野地区あげての大きな事業であったと思われる。

9. 下高野の石造物調査データからの考察

（1）下高野の道標で読み解く「臼井～米本道」

まず、表 2 の道標付庚申塔 9 基（I-9～17）と、表 10 の道標 1 基（IX-7）所在地①と③～⑩を表 1 の地図で見ると、下高野の集落に接した南北入口⑧と⑨の二か所以外は、集落から西へ離れた④から③までの東西に延びる道沿いの分岐点に点在している。江戸時代の絵図（注 4）で見てもわずかに畑があるばかりの（現在はゴルフ場となっている）野山を貫く道で、この人里離れた風景は、道標が建てられ始めた明治期においても同じであったろう。

10 基の道標が指し示す地名を表 11 にまとめてみると、下高野地区の東側（臼井方面）の地名が 17 例、西側（米本方面）が 11 例で、東西方向の道案内としての機能が顕著である。この下高野を通る東西の道は、『八千代の道しるべ』（注 5）で、「米本稲荷道・小竹水神橋からのお参り道」として紹介された古道である。その後の調査で I-12～14 の 3 基が見つかって、特に明治から戦前までの行先では「米本稲荷」の指示が 5 基となり、「臼井～米本道」の地図上の復元と、時代による道の性格の変化もより明らかになった。

昭和 15 年までの道標表記では、特に「米本稲荷」や生活用品の入手に便利な「米本城橋」、また佐倉藩時代の先崎・青菅の隣村や臼井宿・佐倉城下への意識が強い。

参詣先の米本稲荷神社は寛政 11 年（1799）の創建、明治 27 年（1894）に「昇り竜下り竜」など優れた彫刻が施された本殿が再建され、現在は八千代市の指定文化財になっている。その本殿再建寄附連名碑には、「米本いなり道」道標（IX-7）を造立した「立石傳右エ門」も名を残していて、この道標の建てられたと推定される明治中期ごろから、下高野や佐倉方面からの参詣が盛んであったと思われる。

戦後の道標の表記では「稲荷」や「城橋」の名が消えて、単に「米本」となり、さらに昭和 40 年の道標では、京成成田線の駅のある成田街道沿いの「志津」「大和田」、バス停があった「先崎」が目標地名となるのも時代を反映していて興味深い。

これら 10 基の道標を辿る旧道は、一部ゴルフ場に分断されているが、下高野の集落の中の⑧から⑨-④-⑩-①-⑭-⑥-⑤と順に廻りながら、昔の面影の残る里道や林道を歩くことができ、途中、保存樹や三山塚、道祖神、庚申塔群などの史跡にも出会える貴重な古道として残っている。

表 11 下高野の道標 10 基（内 庚申塔 9 基）が示す行先地名の頻度

方面	地名	頻度	地名	頻度	地名	頻度	地名	頻度
東	先崎	5	青菅	5	臼井	5	佐倉	2
西	米本稻荷	5	米本城橋	4	米本	2		
南	上高野	2	志津（昭和 40）	1	大和田（昭和 40）	1		
北	保品	3						
自地区	下高野	1	当区	1				

表 12 下高野地区を除く八千代市内の女人講石塔と男性の講の石塔の同時造立事例

	地区	女人講石塔	造立年月日 *は 1 月以内の違い	西暦	男性の講の石塔
1	吉橋 尾崎	念仏塔（地藏像）	寛文 8・10・10	1668	二十三夜塔（勢至像）
2	吉橋 寺台	念仏塔（聖観音像）	元禄 5・2・23	1692	二十三夜塔（勢至像）
3	萱田 長福寺	十九夜塔	正徳 3・9・吉*	1713	念仏塔（大日如来像）
4	吉橋 尾崎	十九夜塔	享和 3・10・吉	1718	庚申塔
5	村上	十九夜塔	享保 11・10・19*	1726	庚申塔
6	麦丸	十九夜塔	元文 5・11・19*	1740	庚申塔
7	村上	十九夜塔	寛保 4・2・吉	1744	庚申塔
8	吉橋 高本	十九夜塔	宝暦 9・10・吉	1759	庚申塔
9	村上	十九夜塔	明和 4・11・吉*	1767	庚申塔
10	吉橋 花輪	十九夜塔	安永 4・12・吉	1775	庚申塔
11	吉橋 高本	十九夜塔	寛政 6・11・吉	1794	庚申塔
12	麦丸	十九夜塔	寛政 8・10・吉	1796	出羽三山塔
13	米本	十九夜塔	寛政 9・10・吉	1797	庚申塔
14	吉橋 花輪	十九夜塔	寛政 12・11・吉	1800	庚申塔
15	村上	十九夜塔	文化 12・11・吉	1815	庚申塔
16	村上	十九夜塔	文化 13・2・吉	1816	庚申塔
17	下市場	十九夜塔	文政 2・2・吉	1819	庚申塔
18	米本	十九夜塔	文政 2・3・吉*	1819	庚申塔
19	吉橋 花輪	如意輪観音塔	天保 3・11	1832	庚申塔
20	吉橋 尾崎	十九夜塔	天保 5・11・吉	1834	庚申塔
21	吉橋 高本	十九夜塔	天保 9・3・吉	1838	庚申塔
22	吉橋 花輪	十九夜塔	弘化 4・2・吉	1847	庚申塔
23	神野	十九夜塔	嘉永 4・11・吉	1851	庚申塔
24	吉橋 高本	如意輪観音塔	文久元・11・吉	1861	庚申塔
25	吉橋 尾崎	十九夜塔	文久元・11・吉	1861	庚申塔
26	吉橋 花輪	子安塔	明治 18・12・吉	1885	庚申塔
27	吉橋 高本	十九夜塔	明治 20・11・吉*	1887	庚申塔
28	村上	十九夜塔	明治 27・10*	1894	出羽三山塔
29	吉橋 花輪	子安塔	昭和 43・11・10	1968	庚申塔

表 13 下高野の女人講と男性の講の各石塔造立時の比較

女人講の石塔					男性（推定）の講の石塔					
No.	造立年月日	西暦	間隔	像容	No.	種類	造立年月日	西暦	間隔	像容
II 1	享保 12・10・吉	1727	0	如	I 1	庚申塔	享保 12・10・吉	1727	0	青
II 2	宝暦 6・10・19	1756	29	如	I 2	庚申塔	宝暦 8・10	1758	31	青
II 3	安永 7・10・吉	1778	22	如						
					I 3	庚申塔	寛政 2・11・吉	1790	32	文
II 4	寛政 6・11・吉	1794	16	如	IV 1	出羽三山塔	寛政 6・11・吉	1794	4	文
II 5	文化 3・2・吉	1806	12	如	I 4	庚申塔	文化 6・11・吉	1809	15	文
					III 1	二十六夜塔	文化 12・11・26	1815	6	文
II 6	文政 3・11・吉	1820	14	如	I 5	庚申塔	文政 5・11・吉	1822	7	文
II 7	文政 10・11・19	1827	7	如						
II 8	天保 10・11・吉	1839	12	子						
II 9	弘化 4・11・吉	1847	8	如						
II 10	安政 2・3・19	1855	8	如	III 2	二十三夜塔	安政 2・2・吉	1855	33	文
					I 6	庚申塔	安政 5・11・吉	1858	3	文
					I 7	庚申塔	文久元・3・吉	1861	3	文
II 11	文久 4・2・吉	1864	9	如	IV 2	出羽三山塔	文久 3・3・吉	1863	2	文
II 12	明治 6・5・吉	1873	9	如						
II 13	明治 13・4	1880	7	如						
II 14	明治 21・4・吉	1888	8	如	I 8	庚申塔	明治 22・4・吉	1889	26	文
II 15	明治 28・3・吉	1895	7	如	I 9	庚申塔	明治 28・3・吉	1895	6	道
II 16	明治 33・3・吉	1900	5	如						
II 17	明治 39・3・吉	1906	6	如	I 10	庚申塔	明治 39・3・吉	1906	11	道
II 18	大正 2・3・吉	1913	7	如	I 11	庚申塔	大正 2・3・吉	1913	7	道
II 19	大正 9・3・吉	1920	7	子	I 12	庚申塔	大正 9・3・吉	1920	7	道
II 20	大正 15・3・吉	1926	6	如	I 13	庚申塔	大正 15・3・吉	1926	6	道
II 21	昭和 8・3・吉	1933	7	子						
II 22	昭和 15・3・吉	1940	7	子	I 14	庚申塔	昭和 15・3・吉	1940	14	道
II 23	昭和 27・3・吉	1952	12	子	I 15	庚申塔	昭和 27・3・吉	1952	12	道
II 24	昭和 33・3・吉	1958	6	子	I 16	庚申塔	昭和 33・3・吉	1958	6	道
II 25	昭和 40・3・吉	1965	7	子	I 17	庚申塔	昭和 40・3・吉	1965	7	道
II 26	昭和 47・3・吉	1972	7	子	I 18	庚申塔	昭和 47・3・吉	1972	7	文
II 27	昭和 54・3・吉	1979	7	子	I 19	庚申塔	昭和 54・3・吉	1979	7	文
II 28	昭和 61・3・吉	1986	7	子	I 20	庚申塔	昭和 61・3・吉	1986	7	文
II 29	平成 5・3・吉	1993	7	子	I 21	庚申塔	平成 5・3・吉	1993	7	文
II 30	平成 12・3・吉	2000	7	子	I 22	庚申塔	平成 12・3・吉	2000	7	文
II 31	平成 19・3・吉	2007	7	子	I 23	庚申塔	平成 19・3・吉	2007	7	文
II 32	平成 26・3・吉	2014	7	子	I 24	庚申塔	平成 26・3・吉	2014	7	文

像容：如＝如意輪観音像 子＝子安像 青＝青面金剛像 文＝文字塔 道＝道標付庚申塔
 年月日の下線は、男・女の講の建立年が一致。間隔の下線は、7年目。

（２）女人講石塔と男性の講の石塔の造立時がシンクロ（一致）する事例

筆者は、これまで吉橋や萱田・麦丸地区などの石造物調査結果から、江戸前期の各村では男性の講と女性の講がそれぞれの供養塔を、時を一にして建立する事例のあることから、女性の地位が石塔造立などの信仰行事では、江戸前期のムラ内で対等であった（注19）と述べてきた。

下高野では、初出の庚申塔と十九夜塔の造立年月日が同一であり、さらに現代も7年おきの同じの日に石建てる習わしが続いているという。（小澤一雄氏談）

確かに、初出の庚申塔（Ⅰ-1）と十九夜塔（Ⅱ-1）は、同じ享保12年10月吉日の建立であり、また明治28年以降では同一年月日の事例が多く、Web上のブログ（注11）にも、十九夜塔32基に庚申塔の造立年を対比させた表が載っていて、近世では1例、近現代では15例の計16例の一致が実証されている。

これらを踏まえ、今回筆者は、庚申塔以外でも男性の講が建立したと推定される供養塔も対象に、女人講石塔の造立年月日との対比を、八千代市内と下高野地区で試みた。

表12は、下高野地区を除く八千代市内の女人講石塔と男性の講の石塔の同時期造立の事例で、近世で25例、近現代で4例、計29例が一致する。特に、吉橋と村上地区では、その傾向が強い。

表13は、下高野地区の女人講と男性の講の各石塔造立時を比較した表で、男性の講の石塔として、庚申塔のほかに出羽三山塔・二十六夜塔・二十三夜塔も加えてみた。その結果、近世では寛政6年11月吉日銘の如意輪観音像塔（Ⅱ-4）と出羽三山塔（Ⅳ-1）、安政2年の十九夜塔（Ⅱ-10）と二十三夜塔（Ⅲ-2）も1か月以内の造立で一致することがわかった。集計すると計24例、近世では同一年が3例と近似年が4例、近現代では同一年が16例と近似年が1例の一致が見られた。

造立年の間隔では、女人講石塔では、近世の7年間隔が1例・5～9年の間隔が3例、近現代では、7年が14例・5～9年が5例。男性の講の石塔では、文化12年の二十六夜塔（Ⅲ-1）を加えることにより、近世では7年が1例・6年が1例、近現代では7年が10例・6年が3例であった。

以上により、女人講石塔は、幕末の弘化4年（1847）から現代までほぼ7年間隔の連続性が明らかに認められ、例外は太平洋戦争前後の12年間のみである。庚申塔もこれにならって、大正2年（1913）から女人講石塔に合わせて、7年間隔の同一時建立が慣習化されたと推測される。

また、男性の講の石塔の造立間隔が大きく開く歴史的背景としては、天明3年（1783）の浅間山噴火と佐倉藩での一揆や、天保期の飢饉（1833～9）、明治維新（1868）後の近代化の時期などが考えられうるが、庚申塚からの移動の際や、路傍に設置され道路拡張などで失われた庚申塔があったのかもしれない。

おわりに

下高野は、二十年前から「八千代の道しるべ」の道標調査や女人講石造物研究の調査で度々訪れていたが、今回、石造物を悉皆調査してみて、あらためてその文化財としての価値の豊かさを再認識させられた。

特に、現代まで連綿と造立が続いている女人講石塔群と庚申塔群は、民俗信仰行事の継承の面からも注目に値する。

道標付庚申塔群は、「臼井～米本」道の存在を明確にし、近代において、米本稻荷神社への参詣道として重要であったことを示していた。

また、女人講石塔群と、庚申塔・二十三夜塔などの男性の講の造立年月日が、江戸時代では初出の享保 12 年を含め 3 例が一致することから、江戸中期前葉のムラでの女性の地位が信仰行事では対等であったと推定され、さらに近代になって十九夜塔と庚申塔を 7 年おきに造立する習わしとして定着し、現代に至っていることは、下高野の石造物群の大きな特徴である。

富士講も、幕末から昭和初期まで活動していたこと、台地の斜面を利用した富士塚が造られ、その中腹には、五合目を模して「女人講中」の「小御嶽石尊」塔が置かれ、女性たちもその利益に浴していたことも新たな発見であった。

また、江戸時代から信仰された出羽三山や秩父などの観音霊場への巡拝も、近代になっても交通手段の発達により、さらに盛んになり、現在も続けられている。

今回の調査では、小島泰堂に関連する石塔、そのほか、長文や多数の人名、風化していた銘文を解読し記録することができた。この記録をムラの文化や歴史を知るための史料として、今後の地域史研究にぜひ活かしていきたいと思う。

なお、本調査の成果である調査票ファイルは、12 月に「ふるさと歴史展」で公開したのち、八千代市立郷土博物館に寄贈する予定である。その他、富士講石造物に関連して下高野の立石家旧蔵の富士講の資料の調査と、福蔵院に隣接した 18 軒の旧家の参り墓の墓塔調査も開始したが、現在も継続調査中であり、この調査の報告は来年度の本誌次号で行いたいと思っている。



調査の様子 左：2018. 4. 19

上&右：5. 15

注（出典）

1. 木原律子「下高野・保品の石造物」『よなもと今昔』9号 阿蘇郷土研究サークル 1990年
2. 「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ 石造文化財』 八千代市史編さん委員会 2006年
3. 「比較地図」ホームページ「歴史的農業環境閲覧システム」 農研機構農業環境変動研究センター <https://habs.dc.affrc.go.jp/index.html>
4. 「堀田備中守領分下総国印旛郡下高野村絵図」清田勝家蔵「絵図に見る八千代の村 絵図解説シート⑧」八千代市立郷土博物館 2017年
5. 「八千代市域道標調査表」『ふるさと発見 八千代の道しるべ』 八千代市郷土歴史研究会 2001年
6. 石田年子「下総地方の十九夜塔」『日本の石仏』153号 日本石仏協会 2015年
7. 蔵由美「北総の子安像塔＝江戸時代後期（文化～天保期）の展開について」『房総の石仏』第21号 房総石造文化財研究会 2011年
8. 横井和子「下高野の十九夜塔」『史談八千代』第11号 1986年
9. 小川奉巳「下高野の十九夜講」『よなもと今昔』8号 1989年
10. 川戸彰「八千代市下高野の十九夜講と十九夜塔」『千葉文華』第29号 千葉県文化財保護協議会 1994年
11. 「十九夜塔の建立式典 下高野」ブログ「まっくろクロスケ」 2014年
<https://makkurokurosk.blog.so-net.ne.jp/2014-03-08>
12. 「下高野 十九夜講 石建と札貼り」ホームページ「民俗探検隊」八千代市教育委員会 2014年
http://www.yachiyo.ed.jp/kyouiku/rekisi/minzoku/minzoku_tankentai.html#41
13. 蔵由美「民俗行事に見る旧村の伝統と新しい街・大和田新田の姿」『史談八千代』第32号 2007年
14. 関和時男「三省翁陰記碑文について」『史談八千代』第26号 2001年
15. 村上昭彦『八千代の文人たち～歌碑・句碑を訪ねて～』 崙書房 2012年
16. 山口 忠「参拝供養塔にみる富士講と大山講について」『史談八千代』第41号 2016年
17. 『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅰ』〔64〕（下高野立石完雄家文書10）1989年
18. 「千葉寺十善講（巡礼とその習俗）」『よなもと今昔』第2号 1983年
19. 蔵由美「吉橋の月待塔と女人講および子供主体の石造物」『史談八千代』40号 2015年